

Title	著者リプライ：『分断するコミュニティ』『分断と対話の社会学』
Sub Title	
Author	塩原, 良和(Shiobara, Yoshikazu)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2018
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.23 (2018. 7) ,p.116- 120
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20180707-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ 『分断するコミュニティ』『分断と対話の社会学』

塩原 良和

私が慶應義塾大学で学んでいた頃から、津田正太郎さんと藤田智子さんには研究仲間として多くの刺激をいただいていた。そのおふたりに『三田社会学』で拙著の書評を書いていただけたのは感慨深い。当時は想像していなかった大学教員の多忙さにも関わらず、丁寧な書評をいただいたことに厚く御礼を申し上げたい。オーストラリア地域研究者として活躍されている藤田さんには『分断するコミュニティ』を、マスコミュニケーション研究の分野で重要な業績を挙げ、ナショナリズムや差別の問題に関心をお持ちの津田さんには『分断と対話の社会学』を、それぞれご高評いただいた。ほぼ同時進行で書き上げた 2 冊への書評を読むことで、それらに表れている私の研究者・大学教員としての立ち位置や方向性を再確認できた。

1. 制度・構造と個人の関係と方法論的複合

私は博士課程以来、オーストラリア地域研究に取り組んでいる。『分断するコミュニティ』は、その最新の成果である。私は日本を拠点としてオーストラリア社会を持続的に眺めることで、エスニック・マイノリティと国家の関係、その変容のあり方の全体像を掴もうとしてきた。そして、この本は新自由主義の批判的研究の潮流に位置づけられるものであり、「コミュニティを通じた統治」という概念枠組を設定することで個別の事例を比較考察した。その結果、新自由主義的政策が社会を制度的に分断していくさまを理論化し、問題提起することができたと思う。

2～5 章では、エスニック・マイノリティ政策の変遷を通じて、その背後にあるオーストラリア社会における先住民族・庇護希望者・移民が置かれた制度的状況を浮き彫りにすることを目指した。そこでは対象からあえて一定の距離を取り、制度や構造の全体像や問題点を分析し、規範的に評価する方法を採用した。他方で、そのような制度的状況に置かれたエスニック・マイノリティの人々の経験そのものに焦点を当てることを、意図的に避けた。だが 6・7 章では一転して、私自身も在外研究時代にその一員であった在豪日本人住民コミュニティを事例に、フィールドワークとインタビューによって得られたデータを吟味することで、オーストラリアで生きる人々のリアリティを描き出そうとした。

一般に誤解されがちであるが、制度や構造に含まれる不正義を強調したからといって、その制度や構造のもとに生きる人々を無力な存在として描き出したことにはならない。個人の日常や人生は制度や構造に拘束されつつも、その制約のなかで個人は主体的に行為することができ、そこから制度や構造が変革されていく可能性があるからである。個人を社会構造のエージェント

シーだとするこうした見解は、社会学において個人と社会の関係性を説明する標準的なモデルだといえる。それを経験的に検証することも、藤田さんに評価していただいたように、『分断するコミュニティ』で目指したことだった。「外部」からの考察によって制度や構造の全体像と問題点を明らかにしたうえで、そのような制度・構造の「内部」でも個人は決して無力ではなく、主体性を持って行為していることを、異なる調査方法・パースペクティブを組み合わせることで、示したかったのである。

しかし藤田さんが指摘したとおり、在豪日本人永住者たちの市民活動を、行政によるコミュニティを通じた統治への抵抗ではなくその帰結として解釈することも可能である。そうした活動は、ミドルクラス的な自己責任規範が当事者たちのあいだに浸透していたことを意味するからだ。そのような両義性については、一応、言及したつもりではある。にもかかわらず6・7章の記述を通じて、かれらの活動のもつ抵抗や主体性といった側面がより強調されているのは確かである。藤田さんが感じた違和感は、制度・構造とそのなかに生きる個人の行為の関係の多面性を、私が十分に描き切れなかったことに由来しているのだろう。

また藤田さんからは、新自由主義的統治によって序列化されていく人々のあいだで、民主的な対話をどのように進めていけるのか、というコメントもいただいた。これについてはオーストラリア社会の実証研究としての『分断するコミュニティ』では明確に論じられておらず、むしろ『分断と対話の社会学』のなかで主張を展開している。

2. 諸事例の独自性と社会変動論的視座

この10年ほど、オーストラリア研究と並行して、日本における外国人住民や多文化共生をめぐる諸問題に関心をもち、様々なかたちで関わってきた。その経験を念頭に置きつつ、社会変動に関心をもつ社会学者として書いたのが『分断と対話の社会学』である。大学生向けの入門書の体裁をとっているが、社会変動論の観点から現代社会の「分断」状況に接近する理論的著作でもある。『ナショナリズムとマスメディア』（勁草書房、2016年）という優れた理論的業績をお持ちの津田さんに評価していただけたのは、とても嬉しい。

ヘイトスピーチ問題を扱った9章での私の記述は、その津田さんの問題意識とも深く関わる。津田さんは、私の見解との相違を表明している。確かに津田さんが指摘するように、在日コリアンへの差別にしても個別の歴史的・社会的文脈がある。それを無視して、グローバリゼーションという社会変動の影響だけですべての差別を説明しようとするのは乱暴である。

しかしいっぽうで、現代日本でヘイトスピーチのような排外主義の標的になっているのは在日コリアンだけではない。アイヌ民族、沖縄の平和・反基地運動、生活保護受給家庭、障がい者、重国籍者、難民・庇護希望者など、様々な社会的カテゴリーに属する人々が被害者になっている。そのうえ、日本以外の国や社会でも様々な排外主義が台頭している。「いったいなぜ、多種多様なカテゴリーに属する人々に対する排外主義が、様々な社会で、いま、同時に、活性化しているのか」という問いに、個々の集団や現象の具体的な歴史的・社会的文脈だけから答

えることはできない。これはまさに社会変動論的な問いであり、それに答えるためには、何らかの理論的一般化が試みられなければならない。

もちろん津田さんが批判しているように、社会の発展から取り残された敗者の不満の爆発としてのヘイトスピーチ、といった説明図式には問題点が多い。『分断と対話の社会学』では代わりに、「後期近代におけるヴァルネラビリティ（不安定さ／傷つきやすさ）の遍在性」という命題を強調している。社会学理論でいう後期近代としての現代社会では、一部の人々だけが不安定で傷つきやすい状態に置かれるわけではない。もちろん、ヴァルネラビリティはマイノリティや弱者、敗者として位置づけられる人々に不平等に過剰配分されるが、にもかかわらず、マジョリティや勝者とされる人々も含めて、すべての人々の日常と人生が何らかのかたちで、一定の不安定さと傷つきやすさを含み込む。こうして遍在するヴァルネラビリティを土壌として排外主義もまた遍在化するが、その表れ方は多様である。

ある土壌に多種多様な植物が生育するとき、そのひとつひとつは育ち方も形態も特徴も異なっている。にもかかわらず、もしその土壌が汚染されれば、有害物質の影響はすべての植物に、ただし場合によっては異なった表れ方で、及ぶだろう。土壌汚染の影響を明らかにするためには、一種類の植物の独自性だけではなく、土壌を共有するすべての植物への有害物質の影響の共通性、その影響の発現形態の多様性についても、考慮しなければならない。同じように、現代社会における排外主義の実証的分析には、その標的となった特定の集団の置かれた歴史的・社会的文脈に注目することはもちろん、ある社会で同時に排外主義の標的となっている様々な集団を比較分析し、その同時性の理由と、同時性を前提とした多様性のあり方を明らかにする作業も必要になる。『分断と対話の社会学』の9章では、その際に必要となる作業仮説を提供した。そしておそらく津田さんは同様の問題意識で、「シニック（シニカルな）・ナショナリズム」という概念を『ナショナリズムとマスメディア』において提起したのではなかろうか。なお私自身は現在、エスニック・マイノリティに限らない多様な集団への排外主義を比較する共同研究プロジェクトを進めている。

3. 大学教育と想像力

『分断と対話の社会学』は、私が勤務校である慶應義塾大学で行った授業の講義ノートをもとにして書かれた。つまりこの本は、大学で社会学を教える教師としての実践の一部でもある。同じく大学教員である津田さんは、マイノリティや弱者とされる人々への「共感」を人々に訴えることは重要だが、難しいと述べる。私も同感である。ただ津田さんとは異なり、私は「共感」と「想像力」を（実際の場面では区別が難しいことを認めつつ）理論的・戦略的に区別すべきだ、と主張している。その場合、想像力とは第一義的には感受性ではなく、知的努力である。つまり想像力は知識を得て、それをある特定の方法で用いることで、高めることができる、すなわち「学ぶ」ことができる。したがって、教師は授業を通じて学生に想像力を「教える」ことができる。

学生個人の感受性に、大学の教師が直接影響を与えることは難しいし、好ましいことだとも限らない。いっぽう大学とは学生が知識を学ぶ場だと見なされており、教員は学生に知識を提供するように要請されている。だとすれば、仮に共感はできなかつたとしても、自分と異なる他者が社会にいて、自分もまた誰かにとっての他者なのだということを学生が想像できるように、日々の授業実践の内容や設定をデザインしなおしていくことが可能なのではないか。これは大学の教師としての私にとって、決定的に重要なことである。なぜなら今日の大学での社会学教育・リベラルアーツ教育の重要な意義は、学生の想像力（あるいは、社会学的想像力）を高めるための知識と機会を提供することだと、考えているからである。

それでは、具体的にどのように授業実践をデザインしなおせばいいのか。そのための道標になるのが『分断と対話の社会学』で再定義した「対話」という概念である。対話とは、傾聴、内省、自己変容とその他者へのフィードバックの繰り返しにより、より適切なあり方での他者との相互承認を目指す営為である。それは社会問題としての分断を解決するための方法論であると同時に、教師が社会への想像力を学生に教える教育実践の方法論でもある。私個人は、学部で担当しているほとんどの科目を、学生の他者と社会への想像力を高める対話の機会を提供する実践と位置づけ、試行錯誤を続けている。それぞれの科目で、学生の背景や教室の状況に応じて、工夫しながら対話の機会を創ろうとしている。といっても、うまくいかないことが多いが。比較的少人数でのアクティブ・ラーニングといった授業デザインが、学生が対話を通じて想像力を学ぶ環境設定としては好ましいが、大教室の講義だからできないわけでもない。もちろん、フィールドワークやボランティア活動を授業に組み込むことは効果的である。

そうした授業の際、私は学生に、対話と想像力の重要性という価値を受け入れるように働きかける。したがってレイシズムのように、その価値と根本的に相容れない思想や態度を学生がもつ場合には、頑なに対話を拒否する学生を解きほぐしていくことを目指す。しかし、対話と想像力の重要性という価値と両立させようと学生が試みている限り、思想や立場の多様性は教室という場所の前提である（多様でなければ、対話をする必要はない）。その際、対話を促すために、学生が自分の思想や立場の自明性や無謬性を疑うように仕向けている。たとえば津田さんの予想とは異なり、私自身はリベラル・ナショナリズムという政治構想に特に否定的ではないのだが、どんな思想にも限界や欠点があることは指摘しなければならない。

藤田さんが『分断するコミュニティ』への書評を通じて投げかけた「どのようにして対話を進めていくのか」という問いへの応答として、私はまず、ひとりの教師として、上述のような実践を追求していきたいと考えている。このような教育実践は、社会問題の解決策としては迂遠かもしれない。しかし教育とは常に迂遠な社会変革の実践なのであり、私は教育を行うことを職務とする。そのうえで同業者だけではなく、他の職務や活動を行っている人々にも、対話と想像力の涵養を鍵概念とした実践をそれぞれの現場で構想していただけるのであれば、とても嬉しい。『分断と対話の社会学』で提案した想像力や対話といった概念は、教師以外の職業や立場の人々にとっても、分断と排外主義を乗り越えるそれぞれの実践を模索する道標になるか

もしれない。対話を通じて想像力を養うきっかけは、日常のありふれた出来事のなかにも存在する。だから大げさに身構えず、身近で些細なことから「とりあえず、なりゆきで」始めてみたら、と終章では提案してみた。それは、個々人の日常的な行為の相乗効果が世界を変えうるという、グローバリゼーションの社会学が描き出す楽観的なビジョンを、その限界を自覚しつつ、ひとまず信頼してみるということである。津田さんが『ナショナリズムとマスメディア』で懸念したように、私たちの社会にシニカルな世界観が広まっているのだとしたら、それと対峙するためにもこの楽観主義を再評価する必要があるのかもしれない。

(しおばら よしかず 慶應義塾大学)